パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会　ニューズレター

太平洋の森から

2014 年 3 月発行
No. 35 号

森を守った若者と子どもたち

伐採の魔の手が刻々と奥地に伸びる

2013年度パプアニューギニア調査・交流・支援訪問の報告

調査日程：2013年11月２日～23日　辻垣正彦・池田光司・清水靖子
声をかけて参加された　大場信義博士

＜はじめに＞

森の民の生き様から学ぶ

2013年の調査の旅は、生命をかけての森の民の生き様と、同時に緊迫した伐採情勢に触れ、多様な経験をした旅となりました。

「ホタルの生態系　原生林のホタル」特別報告

マラクル村は折しも新月の夜にあたり、ホタル研究の第一人者、大場信義博士の研究に最高の日となりました。

最高裁判所に押し寄せる訴え

この2013年は、政府の土地収奪政策、SABL（スペシアル・アグリカルチャー・ビジネス・リース99年）の結果として、森と土地を奪われた側からの訴訟が、続々と最高裁判所に持ち込まれており、ニューブリテン島南岸の森のポール・パボロさんたちの裁判も、まさにその一つでした。「偽りの土地台帳をつくらせてそれを元にSABL政策のもとで、99年間の契約をして伐採会社を招いた地主会社と、その代表たちを最高裁判所に訴えた裁判」です。ポマタ・ラロパル地域合同の訴状でした。（本文中の辻垣さんの報告をご覧ください。）

森を奪われた側からの“操業一時停止要求”は、伐採会社側に立った地方裁判所によって却下され、企業の伐採の魔の手が、刻々と奥地に伸びているなかでの最高裁への提訴でした。

まさにそのために、老人も子供も非暴力の抵抗を、あらゆる方法で繰り返しているというのがポマタ・ラロパル地域の現状でした。企業はポリスを雇い、素手の村人に暴力を振るいつづけますが、政府も役人も村人を助けないのです。

生命をかけた老人

ラバウル滞在最後の日に、瀕死の重症で病院に担ぎ込まれたラロパル地域の老人がいました。森を守る抵抗を行った村人への、伐採企業の武装団の報復でした。（11月９日）

「武装団は前日から教会近くで夜を過ごしたのちに、翌朝の教会のミサでの礼拝中の村人を急襲した。そのとき一人の老人マチアス・パトさんは、素手で阻止しようとしたため、男たちは彼の腕に切りつけ、肺を刺し、頭を石で傷つけた。」

ポストクーリエー紙は、この事件を2013年11月20日に報道し、不正な伐採と、民の苦悩が知られるようになりました。

命をかけて森を守ろうとした老人がいた。同じ抵抗をした子どもや若者たちがいた（表紙の写真）。知られざる民の、小さくて大きな抵抗の数々を、私たちも日本の皆様に広く伝えたい。森の民の生き様から学びたい。私たちの会は、小さな力ではあるけれども、皆様と共に、森の民と連携して、森を守る活動をつづけて行きたいとの決意をさらに強めました。

news
Elder injured over land fight

ホームページ（https://sites.google.com/site/pngforestcom/home）にも逐次、大切なニュースを掲載していきます。

なお、ニューズレター本号の作成には田口美和子さんと荒川俊児さんにお世話になりました。今後をご期待ください。

【表紙の写真】

◆森を守った若者と子どもたち。伐採企業はポリスを使って彼らを拘束した後に、裁判所に出頭させた。その途次に出会ったので撮影をした。（2013年11月８日に撮影）。

◆伐採の魔の手が４万ヘクタールの森に伸びて行く。（2013年11月４日に上空から撮影）

以上　清水靖子

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」主催

原生林のマラクル村のホタル　奇跡の生態系

大場信義（大場蛍研究所 / 神奈川大学総合理学研究所客員教授）

原生林のマラクル村の豊かな泉

2012年にホタルが集合していたイヌビワの木

私は、「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」の清水靖子・辻垣正彦・池田光司さんたちとともに、2013年11月2～12日の10日間、パプアニューギニアのニューブリテン島を訪れた。

今回の私の旅行目的はホタルの観察、調査研究であり、これまでにニューギニア島西部の西イリアン（インドネシア）を含めて6回目となる。

今回のホタル観察地は、パプアニューギニアの首都ポートモレスビーから国内線で約1時間のニューブリテン島のジャキノット湾岸のマラクル村である。

宿泊はそれぞれの地にある教会施設に大変お世話になった。

◎調査経過

11月2日　東京―香港―ポートモレスビー

11月3日　ラバウル（泊）

11月4日　ジャキノット湾の原生林のマラクル村へ

ラバウルから小型飛行機に乗り、約1時間でジャキノット湾近くの小さな空港に到着。途中上空からは原生林と、その一部の伐採現場を見ることができた。更に、そこから小型ボートで約1時間移動し、マラクル村に着いた。集落に入ると小学校の子供たちが多数寄ってきて天真爛漫の姿を見せてくれた。

村内は緑豊かな静かな環境であり、一見してホタルが多数棲息するような環境であった。

まず一昨年辻垣さんが見られたというホタルの集合する木を観察した。その木は高さ約10m、幹の太さが約20cmのイヌビワの1種であった。辻垣さんによると昼間でも葉裏にホタルが多数とまっていたというが、今回は確認されなかった。

その後、海岸近くの泉に案内頂いた。人々はここで洗濯、水浴び、飲料水を汲み、泉は人々の生活を支えていた。背後には深い森が広がり、この豊富な地下水を生み出している。森は泉を生み出し、泉は人々の生活を支え、その集落にはホタルをはじめとする様々な生き物が育まれていると思われた。

この集落ではこうした自然の循環が見事に成立して、ほぼ自給自足の生活が続いていると思われる。

夕方から再びイヌビワの木を観察。その後、約200m移動してホタルが集合する木を観察。

マラクル村の緑豊かな環境

エフボタルが集合するネムの木と葉裏のエフボタル

ホタルが集合していたのはネムの木の古木であり、既に多数のホタルが発光していた。木の高さは約10m、幹の太さは25cmほどであった。集合するホタルは、以前ニューアイルランド島のケヴィアンで見たホタルと同じ種であり、**Pteroptyx effulgenns（以後エフボタルとよぶ）**であった。

◎ホタルの奇跡

エフボタルは一斉に点滅していわゆる集団同時明滅するのが特徴である。

雄の発光間隔は約0.8秒であるが、雌は同調しない。雄の集団発光は、発光開始直後はバラバラであるが、時間経過とともに一斉に周期が揃う。しかも、木全体が一斉に光るうちに木の上方から下方へ、斜め上方から斜下方へ、また同心円が広がるように発光するなど刻一刻と変化して常に光り方が変化する。単なる電気仕掛で光るクリスマスツリーとは、趣が全く異なる。

こうした変化が生じる理由の一つは、発光リズムを司るペースメーカーが一定時間経つと交代し、そのときに生じる時間差が影響していると考えられる。**集合したホタルは相手の光を見て、それに正確に合わせて発光しているのである。このタイミングは数十分の1秒ほどであり、気の遠くなる長い時間をかけて化学発光を自由自在に操れるように進化を遂げてきたのである。**

また雄と雌の出会いを確実にするために、特定の木に集合して一斉発光することで、ジャングルで羽化した新成虫を誘引している。さらに雄と雌とでは発光色や発光器の形を違えているなど、相手を見極めやすい工夫をしている。

ホタルの木の立地条件は重要であり、人家周辺の広がった空間が必要であり、その背後には原生林が確保されていることが必須条件である。即ち、交尾済みの雌は産卵のために木から離脱して、森の中に移動する。もし全ての交尾した雌が、この木の下で産卵すると孵化した幼虫は過密となり、餌となる陸生巻貝が食べ尽

発光最盛期のエフボタル

くされて餌不足に陥り、棲息不能となるに違いない。ホタルはこうした事態を回避するために、産卵のために交尾済みの雌は分散移動している。

木に集まるホタルの集団の大きさによって、分散距離を調節していると考えられるが、どのようにして集団サイズを知るのか謎に包まれている。

また、１本の木にいつも集合していると、捕食者は容易にホタルを食べることが可能となるが、このことを避けるために、ホタル自身が異臭を放ち、外敵が忌避する分泌物を出す。

このような外敵を忌避する分泌物質を有することを警告する手段として発光を機能させている。即ちホタルの発光は外敵に対する警告シグナルであるとともに、光のコミュニケーションとして機能しており、驚異の生命現象である。

私はこのホタルの木の構造と機能をうまく利用している多くの昆虫類がいることを明らかにした。それはホタルに擬態するカミキリモドキやジョウカイボンなどの存在であり、これらの擬態昆虫はホタルのように発光せず、また忌避物資を分泌できない。そこでホタルに色彩パターンを似せてホタルの大集団のなかに紛れ込んで、外敵から身を守るように進化している。

さらに陸生貝類などの餌資源は、原生林の保水力に育まれるため、森の存在なしにはホタルの木は成り立たない。また、ホタルは光によるコミュニケーションを行っているために、ホタルの木に人工照明が当てられると棲息できなくなり、移動するか姿を消すことになる。

マラクル村には豊かな泉が湧いていて、背後に原生林が広がっている。こうしたことがマラクル村のホタルを育んでいて、ホタルと森の関係は切っても切り離せない関係になっている。マラクル村にはこうした奇跡の生態系が維持されているのである。ホタルの木のホタルが放つ光は淡いが、そこには命の営みがあり、それが同じ命を持つ私たちに感動をあたえてくれる。

11月５日　マラクル村

昨夜観察したネムの木を昼間に観察。

ネムの木には、シダの１種であるオオタニワタリがたくさん着生。その垂れ下がった葉には、多数のエフボタルがとまって静止していた。

よく調べるとネムの木の葉裏にもエフボタルが止まっていたが、その個体数は多くなかった。周囲の低木の葉裏にも見ることができたが、夜間にみられる発光個体数、密度に比較すると格段に少なかった。

11月６日　マラクル村

昼間に同じ場所でネムの木を観察。

昨日オオタニワタリの葉にとまっていたエフボタルは、今日はほとんど見ることができなかったが、ネムの木の幹や葉裏には止まっており、止まる場所が日によって異なることが確認された。

夕方再び発光行動を観察。現地に行く途中で、**エフボタルとは全く異なる発光のしかたをする新たなホタルが棲息することを確認できた。**

発光パターンは日本のヒメボタルのようであるが、

エフボタルに似た別種のホタルとその生息環境

別種のホタルの発光軌跡

体のサイズが大きく、エフボタルよりも幅広で大きかった。このホタルの発光活動は30分ほどで終わり、きわめて短時間の観察しかできなかった。

その後に昨夜と同様にネムの木のエフボタルの発光行動を観察した。この日も子供達とともに観察を行った。観察中にホタルの生態の話をすると、大変興味を持っていろいろと質問を投げかけてきた。こうしたなかで、日本のホタルの歌を紹介したところ、一緒に合唱してくれて、大変楽しいひと時となった。深夜まで私の観察に付き合ってくれたために心細い思いをせずに過ごせたことは誠に嬉しいことであった。

11月7日　マラクル村

少し早めに昨夜確認した**別種のホタルの発光行動を観察。**

発光開始時刻は黄昏時よりも少し暗くなったころで、地表から50cm ～ 100cmの高さを直線的にフラッシュ光を放ち飛翔する行動が観察された。発光開始後10分ほどで個体数が増加し、数十個体の発光をみることができた。

生息地は林床の草地であり、特定の場所に出現した。飛翔高度が地表50 ～ 100cmであり、広範囲にやや直線的に飛翔発光する発光行動は、日本のヒメボタルとよく似た発光行動であり、発光色もヒメボタルと似ている。また、エフボタルよりも発光開始時刻が早く、**終了時刻も早い。さらに、エフボタルのように発光周期を同調させることはない。**

この別種のホタルの外部形態は次のとおりである。

体長約12mm、幅広で、ニューアイルランド島のケヴィアンに分布するAtyphella gurini やタイランドほかに分布するLuciola circumdataに似ている。

前胸背は橙色、正中線は不明瞭、上翅と体は黒色。Atyphella gurini　とは小盾板が黒色であることが相違する。幼虫は体長約14ｍｍ（終齢？）で扁平・幅広。全体に淡褐色で暗褐色の斑紋がある。

11月８日　マラクル村からラバウルへ

小型飛行機で約１時間、原生林上空を飛行。上空から森や伐採状況が見られた。

11月９日～ 10日　ラバウル泊

教会構内を散策し、動植物を観察。

マンゴーの大木には圧倒された。ネムの木の大木に

森林伐採状況

ホタルが集まると付近の住民から情報を得たので夜に観察したがホタルは見られなかった。年により発生地を変えることも考えられるので、今後の調査が求められる。ネムの木は数種類みられ、赤や黄色の花を咲かせていた。

11月11日　ラバウル―ポートモレスビー（泊）

飛行機から森の伐採状況をみることができた。かなり大規模な伐採もみられ、ホタルが棲むような環境が破壊されないように願うばかりである。

ラバウルの噴煙を上げている火山

11月12日　ポートモレスビーから香港へ

11月13日　東京

今回のホタルの観察中に集落の子供たちとホタルを通して親しく交流できたことは私にとって最大の成果であった。

ホタルが語りかけてくる不思議やメッセージを直接子供たちに伝え、それに子供たちが大変興味を抱き、将来生物学者になりたいという子まで現れたことは、なにより嬉しいことであった。

パプアニューギニアの恵み多い森を後世への宝として伝えて行く上で、こうした子供たちの関心の高まりがとても重要であると強く感じた旅であった。

SABL政策のもと不法伐採と闘うポール・パブロさんと村人達

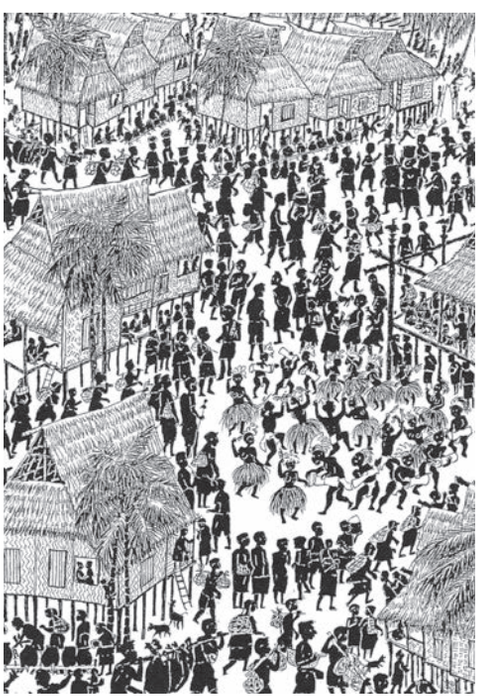
―ドリナ・キャンプ（積出基地）とリナ川上流の皆伐の現場を訪ねて―

報告者　辻垣正彦

2013年11月2日　成田を経ち、香港経由でパプアの首都ポートモレスビーに到着した。

11月3日　ポートモレスビーで、マーロン・クエリナドさんに会い旧交を暖める。彼は2度来日しており、銀座で個展も開催した。また「森の暮しの記憶」を、「森を守る会」制作、清水靖子との共著で1998年「自由国民社」から出版。この本は訴えている。かつて豊かな森と川があったゴゴール渓谷の彼の森は、旧本州製紙により皆伐され、さらにユーカリとアカシアが植林され荒れた大地となった。「日本は、もうこういう破壊を止めるべきだ」と願って描いたモノクロのペン画集である。彼は今も、記憶に残されたゴゴール渓谷の村の生き生きとした姿をキャンバスに描き続けている。

（詳細はゴゴール渓谷訪問の清水の報告へとつづく→）



村の祭りの絵

マーロンさんとともに

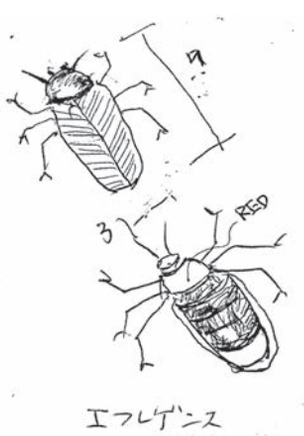
マラクル村滞在

11月4日から8日迄、マラクル村に滞在した。真白い浜辺と、コバルトブルーの海、奥深い原生林。豊かに湧くスシ川の泉は、相変わらず村の生活の中心。豊かで深いブルーの水が湧き出し、勢いのある流れとなってジャッキノット湾へ注いでいる。

食器を洗い、子供達は朝から水を汲みに集まり、思い思いの入れ物を持って家へ運ぶ。

この泉は、マラクル村にある7つの部落バイン、ルーライ、ケルケレーナ、マラクル、ワガン、パロル、ピガプーナの交流の場でもあり、センターホールでもある。

朝は「モーニング」、昼からは「アビヌーン」と挨拶し、大人も子供もおばあちゃんも、すれ違う度に笑顔で挨拶。空気がおいしい。私も思いっきり深呼吸をする。頭に大きな金ダライ、その中に薬缶や食器を入れ、胸を張って、草の生える道を堂々と歩む若い女性たち。ガーデンに使うサーベルのような長いナイフを手に持ち、名も知れぬ白い花を髪飾りにしている縮れ毛の若者。子供達は親しげに大きな澄んだ目で僕らを見上げる。ある子供は不思議そうに、あるものは親しげに、また恥ずかしそうに。



マラクルは自然そのもの。今は乾期、夕方からはホタルの樹が点滅をはじめ、南十字星や瞬く満点の夜空に同化する。

滞在中、大場博士は、朝食後すぐに宿泊している住まいから坂を下り、村のメインストリートである草が生える道の脇のネムの木の下に陣取って観察。夕食もそこそこに、又、夜の10時過ぎ迄観察、そして資料の整理。そこを通る村人達や子供達ばかりでなく、村中の話題になったに違いない。

2011年私達が訪れた時には、ホタルの集合する樹はイヌビワの古木であったが、今回はネムに変わっていた。ホタルたちは刻一刻と光を変化させ、光の群れは想像を絶する美しさでこの世のものとは思えない。

折しも新月の夜で、その生き生きとした光は天から降る様でもあり、まさに蛍、ほーたる(星が降る)であり、この世の奇跡である。毎晩のように大場さんのお話しを聞きながら、夜遅く迄眺めていた。

11月5日、私たちの世話役のリヌスさんの案内で、リリナ川へカヌーで釣りに出かける。エサはヤドカリ。ブッシュの木の根元に居る。殻を割って中身を針に付ける。今回は海の側の河口で釣り始める。7m位の川幅で、大きな川ではないが水量が多く流れは速い。雨が続き、ささ濁りで釣れそうな気配。岸辺に枝が生い茂り淀みもある。8m、7m、4m　3本の渓流竿を日本から持参。さっそく胸をときめかせながら第一投。(前回は20～25cmのイシモチのような魚が釣れ、気持ちよい手応えを感じたが、今回は15cm位のもの7匹であった。前回は小型のカヌーに乗り換えて川をさか上り、釣り環境は上々であったが、今回は丘釣り。この程度で満足しなければならないのだろう。)

宿に帰り唐揚げにして皆で食したが、骨は硬いが旨いと言ってくれた。同行した若者にも竿を貸したがすぐ上達。上手な釣師である。

11月6日は、7つの村々を池田、リヌスさんと共に訪問。山の上のラバレ村・パロル村・ケルケレーナ村へ行くには、山路できびしいものがあったが、村の美しいたたずまいや、村人の笑顔を見ると疲れも吹っ飛んでしまった。これらの集落では生活用水を、毎日厳しい坂をスシ泉迄下り、薬缶やペットボトルに汲んで山路を上り運んでいたのである。この水と森との切り離すことの出来ない関係を、文明の力に頼らず、その誘惑にも負けずに守り続けているのは驚きである。

マラクル村からジャキノット湾を超えた西方のポマタ、ラロパル、ナキウラ地域には、すでに伐採の魔の手が伸びている。経済最優先の世界で、どこ迄この森を守り続けられるだろうか。我々の運動にも直接かかわる待った無しの重大な問題でもある。

SABL政策の不正な契約によって森と土地が奪われたポマタ地域へ

ＳＡＢＬ東ニューブリテン地図

11月7日、ポマタ地域に。

ポール・パボロさんの案内で清水、池田、辻垣がボートで訪れる。

まずは積出港のドリナ・キャンプへ。うず高く積まれた、おびただしい原木。運搬船も桟橋も見える。SABL下に入れられてしまった広大な4万ヘクタールの森（ポマタ地域、ラロパル地域、ナキウラ地域）が西方と奥地にひろがる。

労働者の長屋風6棟の宿舎が海岸沿いにあり、内陸にはブルドーザーや木を移動させる大型ユンボー、体育館のような巨大な整備工場が可動している。土場には直径が人の背丈を越える、長さ10m以上ある原木が、うず高く見渡す限り積まれ、船による積み出しを待っている。

積み出し港ドリナ・キャンプ

私たちの到着時に、たまたま埠頭にポマタ・インヴエストメント社（地主会社）の幹部達が集まっていた。清水さんがインタビューをする。昨年インタビューした長老のジェームズ・ルトゥカルさんは、そこにいた

地主会社の幹部にインタビュー

が、「今まで何隻ぐらいの積出があったの」と質問すると答えられず、それを機に逃げ出す。若手のジョー・ケイさん、ジェリー・コルマニーさん、パイウスさん、ヒューベルト・キニさんたちが、代わって答える。

「30回から35回積出があった。」「樹種は、タウン、カロフィルム、ローズ・ウッド、クイラ、マラスなど」「首長のパイウス（契約後死亡）が伐採契約をしてしまった。」としきりに責任を押し付けている。「SABL政策の契約で土地リースが行われたので、おまえたち地主に、操業をストップさせる権利はないと伐採会社側は言う。」「企業は約束した病院・学校など何も建ててくれない。こちらから会いに行こうとしても応じてくれない。我々は何も受け取っていない。」「伐採会社と私たち地主会社の関係はうまく行っていない。」

ヒューベルトさんはベトナム、中国、日本などに丸太を積んで行った外國船で働いていたそうで、「私がこの土地に戻ってきたときには、すでに契約も終わっていた。現在死んだパイウスさんに代わって地主会社の代表をしている。」「（世界最大のリンブナン・ヒジャウ社の子会社）のニューギニー・ランバー社が伐採をしている。」「もし、可能なら、伐採を止めさせたい」などと語る。

しかし現実は、「ジェームズ・ルトゥカルさんたちは、嘘と脅しで住民の抵抗を抑え、伐採企業に伐採を継続させているのだよ」とポール・パボロさんは言う。

今号ニューズレターの導入の記事に出てくるラロパル地域での老人重症事件は、まさに地主会社が組織した武装集団が、村人を襲った事件である。事態は緊迫している。

ポール・パボロさんたちは、書類偽造と不法契約の証拠を取り揃えて、地主会社Pomata Investment社とRalopo l Investment社と代表者たちを最高裁判所へ2013年9月3日に起訴した。（ポマタ地域とラロパル地域合同の訴訟）。（→書類偽造と不正の詳細は前回のニューズレターとホームページにも記載開始したので参照にされたい）

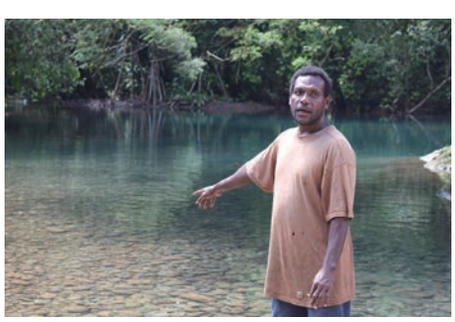
雨が激しくなり、一旦カイトン村へ戻り学校で雨宿り。校長先生に頼まれ、清水と辻垣が日本の森との関係や隠された伐採の真相について話す。ポール・パボロさんも、ポマタ地域のSABL政策による違法伐採への訴訟と、破壊の現実を話す。

池田さんを交えて子供達と歌の交歓をする。子供達の歌声は力があり心を震わせるものがあった。歌はパプアの子供達にとって、生活の一部、心の一部なのだろう。

真剣に聴き入る子どもたち

子供達に別れを告げ、ポール・パボロさんと数人の若者達に案内され、2艘のボートでリナ川の伐採現場と、造成中のオイル・パーム・プランテーション地に向かう。

「ニューギニー・ランバー社が伐採を始める前の川は清く澄み、石は輝き、泉の水は清らかだった。」と彼らは言った。今は、細かい土砂と、車の油と化学物質が、石の表面を覆い、川のほとりに湧き出ている泉の水は、もう飲めなくなった。


川の汚染を嘆くポール・パボロさん

ボートは30分程川を上って停まった。そこには、川を横断して伐採道路があった。川の上を機材が走って

いる。川底の石は茶色に変色していた。

村を出ている村人も、クリスマスになると古里の村に集まり、この川で過ごすのを楽しみにしてきたそうである。でも今はその楽しみも奪われてしまった。

村の若者

丸太の積出のために作られた道と、焼払われ造成された隣接するオイル・パーム・プランテーションでは、大地の赤土が剥き出しになっていた。一本の剥き出しの太い道が獲物を狙う蛇のように原生林の奥地へ伸びていく。殺伐とした景色である。

政府によるSABL政策に乗り、マレーシア系のリンブナン・ビジャウ社が、広大な原生林を持つ各地域の地主の代表を勧誘し、不正な土地台帳をつくらせ、99年間の土地リース契約をさせてしまっていた。それを元に、森林省が、リンブナン・ヒジャウ社に伐採と丸太輸出、さらにはオイル・パーム・プランテーションのための皆伐の許可を出しているという仕組みであった。村人が全く関知しない中で。

企業の最大の狙いは、CUT and RUNで急速に原生林の伐採と、丸太輸出で儲けて、逃げることにある。様々な約束は守らない。

ポマタ地域では、2004年から仲介人が企業からの金をばら撒き、政府と地主を勧誘し、2009年に政府は伐採企業リンブナン・ヒジャウ社に皆伐許可を与えてしまった。

以来、村人達は生命がけで抵抗運動と裁判を続けている。

企業とポリスから脅され暴力を振るわれて、重症を負った村人もいる。

しかし子どもたちも含めて村人は抵抗を止めていない。

現在も抵抗を続けている。ポマタ地域・ラロパル地域・ナキウラ地域の全域にその抵抗は広がっている。

1989年、足尾銅山鉱毒事件で鉱毒停止を訴えて投獄された田中正造を思い出す。

政治家と官僚と会社が一体となって村人をあざむき、鉱毒を流しながらそれを覆い隠し、ついには谷中村を水没させ、農民の生命とも云える農地を奪い追払った事件である。

パプアニューギニアの原生林を守っている村人を、企業が政府と組んで、権力と金で蹂躙し、迫害しているのと同じ構図である。

田中正造は云っている。

「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と。

残された最後の原生林、先祖からの森を守るため、パウロ・パボロさんをリーダーとする村人たちが、生命をかけて抵抗し、企業の不法契約と伐採停止を訴える裁判を最高裁で継続させている。このことを、私たちは世に問い、その裁判を応援したい。

裁判には、交通費、ガソリン代、滞在費、宿泊費、生活費、弁護士の費用、事務費など多大な費用を要する。

今回は「森を守る会」のメンバーからの「裁判支援と限定した支援金」を、法律家の協力を得て、渡してきた。

裁判支援のお金を渡す

今後も、皆様の心からの支援を引きつづきお願いしたい。

※ポマタ関係の詳細は、前号ニュースレター及びホームページに記載してあります。

※なお、2012年の調査報告の動画はすでに編集してDVDを作成した。2013年も作成途次にある。地球最後の原生林の輝く暮らしと、伐採のコントラストを、ぜひ動画で味わって頂きたい。

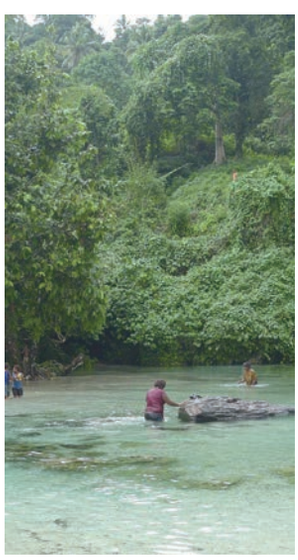
申し込みは辻垣事務所まで。送料を入れて1200円です。

マラクル村の豊かさ

報告者　池田光司

マラクル村は、ニューブリテン島東端にあるラバウルから南西に小型飛行機で約１時間、そして７～８人程度が乗れる小型船舶で約30分のところにあります。半径約７kmの円弧状をしたジャキノット湾の西に位置し、人々は森，川，泉，海と共に、自給自足の暮らしを営んでいます。私たちは、そのマラクル村に、昨年の11月４日(月)から８日(金)まで滞在しました。うち１日は、小型船舶でポール・パボロさんのカイトン村に森林伐採の状況を調査に行き、最後の日は朝早く出立しましたので、村で過ごしたのは実質３日間となります。短い滞在でしたが、時間に追われることなく、村の人々と交わりながらゆっくりと過ごすことができました。そのような中で印象に残ったことがいくつかありました。

何と言っても泉での水浴びです。宿泊所を出て10分も歩かないうちに、村の人々が水を汲んだり、洗い物をしたり、身体を洗ったりしている泉に着きます。泉には森を通って湧き出てきた水が絶え間なく流れ込み、その水は目の前の海へと流れていきます。男性と女性は使う場所が分かれていて、森に近い方が男性、海に近い方が女性の使う場所となっています。泉にざぶんと身体を沈めると、ひんやりとやわらかな水に包まれ、身体が芯から解き放たれているような感覚を覚えます。そして、心の壁を必要としない村の人々の出会いが可能となります。泉が持つ不思議な力です。滞在中、水浴びに通うのが日課となりました。



次は、村の人々が持つ、驚くべきバランス感覚です。雨でぬかるんだ急な坂道を女性が下りていきます。頭には金だらい、その中には泉で洗う食器が、そして、右手にはやかん、左脇には子供を抱えています。背筋をピンと伸ばしてバランスを崩すことなく、平然と下りていきます。足は裸足です。私にとっては、靴をはいて数歩歩くと滑って尻もちをつきそうになる、恐る恐る下りるしかない坂道です。体幹がしっかりした素晴らしい歩き方です。その女性だけではありません。村で出会う女性は、同じように金だらいを頭に載せて笑顔で往き過ぎます。小さな女の子も、ちょこんとやかんを載せてお手伝いです。男性も同じように素晴らしいバランス感覚を持っています。川で見かけた一コマですが、突然両手でつかめるほどの丸太を２本持ってきて何をするのかと見ていると、その２本を三角屋根のような形に組んで即席の橋を作って川を渡っていったのです。それも手放しで、平然と渡っていったのです。しかし、３～５才ぐらいの男の子が数人で丸太の上で元気よく走り回っているのを見ると、手放しで即席の橋を渡るのも、さもありなんといったところです。特別なトレーニングをする様子はありません。男性も女性も、小さなころから生活の中で自然にバランス感覚を身につけたといった感じです。それが、何世代にもわたって受け継がれているのでしょう。彼女ら彼らの足の裏と身体をつなぐ感覚はどうなっているのでしょうか。私たちでは感じることのできない、鋭く

倒木を利用して川を渡る若者

繊細で、かつ強くしっかりした感覚を持っていることと思います。バランス感覚だけではありません、遠くのものを見分けたり森の中で鳥や動物を見つけたりする目、花や木の香りを嗅ぎ分ける鼻など、まだまだ計り知れない身体感覚を持っています。

三つ目は、屋外での団らんです。宿泊所を出た所に、煮炊き用の火をくべる小屋がありました。柱と屋根だけの質素な小屋ですが、そこで数人が腰をかけて楽しそうに語らっている様子を幾度となく見かけました。その他にも、村を歩いていると、数人が腰かけて語らっている様子を少なからず見かけました。時間が、ゆっくりと流れていました。ところで、村はマラリアの危険地帯にあります。村の人に「蚊は怖いか？」と尋ねると、冗談まじりに「怖いぞ」と言って笑います。しかし、それを聞いた私たちは真剣です。マラリアにかかっては大変と、蚊帳，蚊取り線香，蚊よけスプレーを使い、なるべく長袖長ズボンの服装をするなど、より一層蚊対策に神経を使います。その側らで、村の人々は半そでのTシャツに、男性は半ズボン、女性は腰巻き、まるで蚊に刺されるのを意に介さないかのようです。もちろん蚊帳，蚊取り線香，蚊よけスプレーは使いません。マラリアの危険の中で、おおらかに過ごしています。

泉の不思議な力、村の人々の驚くべき身体感覚、屋外での団らん、これらは私たちの失ってきた豊かさと言えます。この豊かさとは、何なのでしょう。村で過ごしていると、温かさ、穏やかさ、瑞々しさ、奥深さなどを感じます。それらの感じは、周囲の豊かな自然からだけでは生まれません。その中で暮らす人々の交わりや所作が周りの自然と合わさることで、はじめて生まれます。「自然と、村の人々が持つ身体感覚とが、呼応することで生まれる豊かさ」と言えます。光のシンフォニーを奏でるホタルの木、これもとても印象に残ったものの一つですが、それも彼らの身体感覚があるからこそ守られてきたのではないでしょうか。彼らは、ホタルを保護しようとして守ってきた訳ではないのです。彼らの暮しそのものが、ホタルを守ってきたのです。

一方、私たちの求めてきた豊かさとは、何なのでしょう。村での生活はとても便利とは言えません。川や泉まで行って飲み水を汲んだり、身体を洗ったり、洗濯をしたりします。食事の支度は、家から少し離れた小屋で火を焚いてします。夜の灯りは、懐中電灯です。エンジンの付いた舟もありますが、限られた数で、手漕ぎのカヌーが海での主役です。陸上の移動手段は歩きで、多くは裸足です。自動車はおろか自転車も見かけません。このような村で暮らしたいですか？「暮らしたいとは思えない」、それが私たちの正直な答えではないでしょうか。しかし、その答えこそが、私たちの求めてきた豊かさの物差しで見たマラクル村です。私たちの求めてきた豊かさ、その多くは、便利さを求めた結果得られる豊かさです。村で過ごした数日の間、不便さを感じることはありましたが、貧しさを感じることはありませんでした。むしろ、今まで述べたように豊かさを感じることの方が多くありました。私たちの持つ便利さの物差しで見るかぎり、村の豊かさは見えてきません。“自然の中で暮らす不便さを受容することで与えられる豊かさ”それがマラクル村の豊かさなのだと思います。

もう一つ、マラクル村の豊かさを考えます。私たちの物差しでは測れない、私たちの失った物差しでしか測れない豊かさです。先ほど「マラリアの危険のある中で、村の人々はそのことを意に介さないかのごとく、おおらかに過ごしています」と述べました。では、村の人はマラリアのことを知らないかというと、そんなことはありません。マラリアのことはよく知っています。マラリアに罹っている人も少なくなく、体調が悪くなるたびに熱を出している人もいます。マラリアで亡くなる人もいます。では、蚊に対するおおらかな態度は、どこからくるのでしょうか。毎日毎日蚊のことを考えていては暮らせない、という諦めからくる見方もあります。しかし、蚊に刺されるリスクを受け入れる、その代わりに日々の自由や自然からの豊かな恵みを手に入れている、という見方もできます。マラクル村の豊かさには、“リスクの受容から与えられる豊かさ”があるように思います。一方、私たちはどうでしょうか。自らの身を守るため、安全と安心を得るために、リスクを排除してきました。リスクを減らすことも必要か

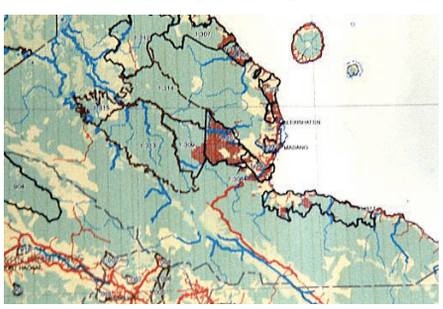
もしれません。しかし、その一方で、我が身のリスクを排除するとともに、周りから与えられている恵みまで排除してしまい、その結果失った豊かさも数多くあるのではないでしょうか。

私たちの豊かさ、それは便利さと自らの身を守ることで得られる快適さにあります。“求める豊かさ”です。一方、その対極にあるのがマラクル村で暮らす人々の豊かさです。それは、自然の中で暮らしながら、不便さとリスクを受容することで与えられきます。“与えられる豊かさ”です。どちらの豊かさが正しいかという議論は、対立を招くのみで解決を導きません。しかし、“求める豊かさ”が行き過ぎてしまっているのは確かです。“求める豊かさ”は富と結びついて、数えきれないほど多くの破壊と対立を生んでいます。マラクル村も、近隣に伐採が入った村々もあり、伐採の圧力に抵抗していないと、村の暮らしは守れないのです。双方の豊かさを見つめて心を静めてバランスを取っていく、そんなプロセスと知恵が必要なのだと思います。“与えられる豊かさ”の大切さを教えてくれるマラクル村、大切な大切な村だと思います。

本州製紙が皆伐したゴゴール渓谷の40年後

2013年11月17日～20日　　報告者　清水靖子

北岸中央やや左寄りの赤い部分がJANT社の伐採地



拡大図

マダン州のゴゴール渓谷を訪れるのは2013年の今回で五度目となる。

そしてその度に胸が締め付けられる思いに浸される。日本の伐採企業が行った操業の結果として、大地も川も未来も失った森の民の、怒りと絶望と虚しさが、私の心に迫ってくるからである。

「私たちは今、政府に補償請求書を出しています。」

ゴゴール渓谷出身のマーロン・クエリナドさん（54歳）は、絶望と知りながらも絞り出すような願いをこめて私に語った。

「極楽鳥の舞う森、狩りの動物を担ぐ人々。清らかな川での魚釣り。タロイモやヤムイモの美味しい大地」。その森の記憶を止めようとでもするかのように、マーロンは絵を描きつづける。クンドゥ・ドラムの音を永遠に響きわたらせながら。

マーロンは13歳のとき、見渡す限りの森を失った。森はチップにされ、輸出され、日本の段ボール紙になってしまった。

本州製紙は、子会社JANT社を設立し、1970年に政府と基本契約を結び、1973年には、マダン州のゴゴール・ナルTRP地域（ゴゴール地区約5万ヘクタール。ナル地区約1万500ヘクタール、バルム地区9500ヘ

（2013年11月21日）

JANT社の皆伐現場 水たまりにマラリアの蚊が湧く

クタール）の皆伐を始めた。住民との合意なしで政府と企業だけの契約であり、5000人以上の村人が暮らし、狩りをし、畑をつくっていたが、森の皆伐がなされて行った。

毎年およそ18万立方メートルをチップにして輸出。跡地にユーカリ、後にアカシアを植えては再度チップ輸出。

当初から天然林の皆伐には激しい抵抗がある上に、1990年以後は、植林用の土地のリースにも、住民の抵抗が拡大し、2004年に撤退。その後台湾系の企業が受け継ぐが2010年に撤退した。

日本政府は、実は国民の税金でこの企業を援助していた。1984年以来、私たちの税金を使用してのOECF（海外経済協力基金）が、JANT社の橋・道路・植林の建設と操業を繰り返し支えていたのである。

その１　1990 ～ 1991年

1990年、皆伐開始から17年目の８月に私は、はじめてゴゴール渓谷とJANT社を訪れ、本州製紙から出向中の日本人福士社長と、もう一人の日本人にインタビューした。「この地域の木はダメな原料です。段ボールのアンコ（灰色の中芯）こにしかならない。」と語った。村々のクリークは淀み、あるいは干上がり、渓谷の中心を流れる大河ゴゴールも、土砂の流入で茶色に染まり、海にはその土砂が堆積していた。

土砂が堆積したゴゴール河口の海

すでにJANT社は、“熱帯雨林を皆伐してチップにする世界唯一の製紙会社”として知られており、**1991年**には、地元の抗議に呼応して、世界各地で抗議行動が起き、日本の本州製紙前でも、 地主代表のジェーム・ジョガマップさんを迎えてのデモも行われた。（5月17日）

JANT社は、政府との契約開始20年後の、更新時期を迎えており、反対運動も高まっていた。そのデモに応えて本州製紙は、「当初は段ボール原料に使用していたが、現在では印刷用紙の原料として一部を配合しているに過ぎない。」とのプレスリリースを出して非難をかわした。私に「アンコにしかならない」と言った９ヶ月後の言い換えである。

JANT社は、年間12万立方メートル（６万トン前後）のチップを輸出するにあたって、７万ヘクタールの天然林では足りずに、さらに天然林１万7000ヘクタールを要求していた。会社が看板としようとする“植林”（チップにして輸出するためのユーカリや、アカシアの植林）も、リースを拒む地主によって難行していた。

土地のリース代も安く（10年間で300キナ程度＝約１万円程度）、伐採権料も僅か（天然林は１立方メートルあたり0.63キナ。植林木は0.18キナ＝数十円にも満たない）で、暮らしの支えにすらならなかった。（以上の伐採権料とリース代はマーロン・クエリナドさんの兄家族の例から）

その２

1992年、政府はJANT社に伐採の一時停止を命じた。

パプアニューギニア政府はJANT社に伐採権の一時延長許可を与えるか否かの国家森林評議会の審議を行う。私たちの友であり、NGO代表の法律家ブライアン・ブラントンさんが反対票を投じるが、政府省庁代表と木材産業協会代表全員は全員賛成票を投じる。

ユーカリ植林でさらに荒廃した大地

干上がったクリーク（子どもたちが立っているところが元クリーク）

この年の９月に、私は皆伐19年目のゴゴール渓谷を訪問。偶然出会ったマーロンの兄サタオさんの案内であった。

焼け付く砂漠のような大地、風もなく、裸にされた草とユーカリの荒野に人々は住んでいた。雨が降ればブルドーザーの開けた穴にマラリア蚊が湧く。マラリアと飢えが人々を苦しめていた。

その３　1995年、三度目のゴゴール訪問。

村人のJANT社への抵抗が最も激しくなった年であった。

抵抗した人を牢に入れる事件、企業と結託したポリスが、反対する住民の家に入って家財道具を壊し、家畜を殺すなどの事件が起きた。これを私に語ったのは、これらを自分の身として経験した、元女性教師のアニロ・サウラガリアさんであった。

「つるつるだったタロイモの皮は、皆伐後には、ザラザラになり、甘味を帯びていたイモの味は、とても不味くなっているの。」

「クリークに水があるかって？もう水は枯れてしまっているのよ。」と苦笑する。

警察を使いながら住民の抵抗を抑えた政府とJANT社は、この1995年に契約更新を実現させた。今度は15年間の契約だった。

私は、ウトゥという奥地の村で、この年日本のカトリックの教会の活動の一端としての地元の樹（クイラ、ローズウッドなど）を植えるプロジェクトに協力した。

地元のクイラなどの苗を植える女性

クイラの苗

注：1996年10月１日、本州製紙は新王子製紙と合併し、王子製紙株式会社となる。

その４

1997年。四度目に私が訪れた年は大干ばつの真只中であった。

人々は飲み水を求めて彷徨い、土を掘っては水が少しでも得られるところを探していた。暑さでイモは育たず、育っても、暑さに耐え切れない虫がイモに入ってしまっていた。皮膚病になったやせ犬のように、人々は身体をポリポリ掻きむしり、「水が悪く身体が痒い」と口々に言っていた。

JANT社の労働者は労働をボイコット中。

干ばつ只中でも、何故かJANT社は植林木の大規模皆伐をしていた。

マーロンさんのお母さんが手にするのは、「親指の先ぐらい」のタロイモ

干ばつの中でも植林木大規模皆伐

その５

五度目の訪問は**2003年**であった。マーロン・クエリナドさんの弟の家スメックさんの家を訪れて、かつて極楽鳥が舞っていたあの“マーロンの絵の泉”を見せて頂いた。「これが泉？」と私は内心つぶやいた。まるで澱んだ水たまりのようだった。

「水の質も変化ってしまって、汲んでもその日しか保存できないのです。」スメックさんの妻が嘆く。

住民はもはや、JANT社に天然林の皆伐を許さなかったし、植林という名の土地のリースに対しても60％の住民が拒否していた。

この年の訪問時の最も清冽な記憶は、原生林を保ち続けている一家族との出会いであった。鳥が舞い、せせらぎが歌い、クイラの柱の住まいは美しく、そこには森閑とした別世界があった。案内人さえ感嘆の声で、「私たちは昔こんな世界に住んでいたのだ!!」と口々に言う。

翌**2004年**、王子製紙下のJANT社は撤退した。操業開始36年目である。

ゴゴール渓谷の天然林を皆伐しつくして、地主からのユーカリ（その後アカシア）への土地リースも不可能で、操業更新はできなかった。

しかし操業を受け継いだ会社があった。台湾系の会社であった。植林を中心に操業を考えていた。日本へのチップ輸出も行われた。その会社も６年後の2010年２月18日には操業を閉じた。

植林地からチップ・ミル工場までの機材なしでの、人力を中心にした伐採、荷揚げ、運搬、荷下ろし。この過酷な重労働で身体を痛めた労働者たちが企業に補償と撤退を迫った。植林木も放置されたままのところが多い。道路などはそのまま荒れ果てて行った。

その５　2013年、皆伐開始40年後の現地訪問

1960年生まれのマーロン・クエリナドさんは、すでに54歳になっており、最初に会ったときの星の瞳のような雰囲気はそのままに、年月を経た重厚さを顔に刻んでいた。

私のために、彼の弟のスメック・クエリナドさん（皆伐された当時５歳、現在45歳）と、ゴゴール・ナル地区地主組織の代表のガラ・トメグさん（48歳）という案内役を、現地に準備しておいてくださった。

トラックの上はスメックさん。
下は水のなくなったクリーク。

読者の皆様は、すでに私が書いた年代記を通して、現在のゴゴール渓谷の状況も想像していただけると思う。

荒地と二次林、あるかなきかの泉とクリーク。低収入にあえぐ村人たち。それらを写真で紹介してみたい。

①荒れ果てた大河ゴゴール。ココア色の川で洗いものをする女たち。橋の上から撮影した。

②放置されたままの植林木。地元の二次林の成長を阻む。

③澱んだクリークと壊れた橋。案内のトメグさんが一番嘆いたことだった。

④アウファン村への道。二次林も育たない草地がつづく。

⑤トメグさんが守ったクイラの樹数本。
さらに巨木になって
午後３時頃、鳥たちのダンスの時間に、
コカトゥのオスとメスが賑やかに舞い歌っていた。

⑥その根元だけに、わずかながら湧いている泉。
水浴びに来ていた母と子。

⑦食器洗いに来た少女（葉っぱは伝統の食器磨き）。
右は彼女の家。

⑧トメグさんのコカトゥ。何故か首をかしげて挨拶する。

⑨外来種の草が蔓延る大地となったゴゴール渓谷。刺のあるものが多く、素足や、裸の村人を痛痒くさせる。

⑩荒地に植えた作物は育ちが悪い。

⑪重い荷物を担いで歩く親子

⑫夫婦で助け合って畑づくり。鍛えられた筋肉が日々の労苦を示す。

⑬ビートル・ナッツを運ぶ女性。マーケットで待つ男たち。噛んで気分を爽快にさせる嗜好品であり、社交用品でもある。

⑭大きな樹タウンの甘い実の季節だった。
マーケットに並ぶが、ゴゴールの民は、この木をすでに失っている。

トメグさん曰く。

「私たちは森を失い、大地も荒れている中に住んでいるのだから、ひとつだけの収入方法に頼れない。多様な作物を努力して育てないとだめ。ココア豆の収入に希望をかけている人々が多いが、それだけではやっていけない。」

「私は政府の森林官をしていて、JANT社に派遣され32年間働いた。だから企業側に立って地主として抵抗しないできた。でも企業が去った現在、ゴゴール・ナル地区地主会社の代表としてマーロンといっしょに政府に補償要求書を出している。JANT社への恐怖に黙っていた人々も、自由に語り出した。」

「ゴゴール渓谷からマーケットまでは遠い。公共のバスに乗ると往復10キナ。マーケットでそれ相応の売りがないと赤字になる。」

「JANT社が造った小さな道路は放置されたまま。今も通じていれば、近道になるのだがなあ〜〜」と名残おしそうな発言も加えるトメグさん。

スメックさん曰く。

「森があっても家計は苦しい。まして森を失った私たちの生計は苦しい。でも、家族が自力でなんらかをやっていかなければならない。子どもたちは森を知らない。私の子どもたちに、せめて森を回復させるよう親が見本を示すこと。それが子どもたちに残す最大のことだと思う。」

二日目は、ゴゴール地区を経て、ナル地区に入った。そこでのテリー・ガビオンさん（現在40歳）の話を事例として記しておく。

テリーさんは6男1女の父。170ヘクタールを持つ部族の長。15人の家長たちを首長制度で抱える。

「JANT社は1982年ごろ、ここに来て皆伐した。私は10歳ぐらいだったから、森の暮らしも、伐採後も、よく覚えているよ。

クリークは、土砂の流入で飲み水にはならない。水量もない。魚もいない。以前には大きな魚がいっぱいいたのに。

大切だった樹はすべて失った。今は二次林と痩せた土地があるだけ。

蚊と飢えとが私たちを苦しめる。私たちの土地が砂漠化しているので、何をしても不作である。それが悲しい。家族を支えるための森がない。せめて私に政府が補償をしてほしい。

今の収入源は、ココア豆の栽培が中心。1ヘクタールの土地にココを植えている。100キナ/2週の収入で。でも皆を養うには、これでは足りない。他の収入源は鶏とブタの飼育。これも赤字になることが多い。」

「日本の企業のJANT社時代に、アカシアを3回植えた。収穫は台湾企業の時代になった。1立方メートルあたり、アカシアは1.5キナ。天然林は1.2キナ。6ヶ月ごとに収穫する。過去に3回収穫。私の一族総出で、男たち15人が、一ヶ月働きつづけて、植林木を切っても、伐採権料は500キナ〜1000キナ程度。部族長として、皆に分け与えると、ほとんどなくなってしまう。森がないから、未来の子どもたちに何も贈るものがなくてこれほど悲しいことはない。」

最後の日に、マダンの港に面したココア輸出業者を訪ねた。袋詰めで倉庫に置かれているココを選別していた。輸出先はマレーシアとベトナムと中国だそうだ。

パプアニューギニアのココアは、村々でココナツの殻などを燃して乾燥させるので燻製の匂いがする。加えてココア豆も苦味を帯びている。苦味風や、無農薬のココア豆を欲する顧客も多い。ココア豆の中に入って豆を駄目にしてしまう虫が近くにまで蔓延してきている。マダンにはまだ入らないが。

ココアの実を割ったところ

マダンを去る11月20日に、ひとつの殺人事件が起きた。空港で飛行機を待つ間、パトロール・カート人々の叫び声・・。

家族を支えるために、マダンの市街までビートル・ナッツを担いで歩いていた男（妻と３児の父親）が、通りがかりの男にビートル・ナッツの荷を奪われ、ナイフで殺傷されるという事件であった。襲った男もビートル・ナッツ売りで生計を立てていた。しかし、自分のビートル・ナッツの木の実を盗まれるに至って、仕返しの機会を狙っていた。その日、彼はナイフを買い、たまたま通りがかったビートル・ナッツ売りに声をかけ、ナイフで切りつけた。人違いの“仕返し”だった。

襲われた男は助けを求めて歩いたが、大量の出血でほぼ即死。襲った男は逮捕された。こうしてふたつの家族が、大切な父親を失った。

マダンを歩いていると貧富の差の拡大を感じる。重いビートル・ナッツや野菜を背負う女たち。道端に何時間も座って、公共バスか、トラックが拾ってくれるのを待つ男たち。どの車も満杯で、なかなか拾ってもらえない。その前をスピードをあげて通り過ぎる車の数々。

パプアニューギニア全体でも、貧富の差が急速に拡大している。物価は上昇する一方で、貧しい人々は今日の生きる糧に喘いでいる。

ビートル・ナッツ事件は、そうした民の暮らしの一場面をあらわしている。

インタビューの最後は、ポートモレスビーのマーロン・クエリナドさんの発言で締めくくる。2013年11月21日。

「狩猟が大好きだったのに狩りの森を奪われた父、美味しいタロイモを育て、料理することが出来なくなった母、父母はそれぞれ悲しい失意の人生を送ったのです。」

「父は無口な人でしたが、先祖代々の聖なる土地だけは“皆伐しないでほしい”と会社に嘆願。でも拒まれました。やっとのことでその一部だけ守れたのですが・・」

「ゴゴール渓谷の住民は読み書きもできませんでした。そして政府や企業は、私たちの無知を利用してきたのです。」

未来の子どもたちに何も残せない、荒廃した大地や汚染しか残せない。人間として、これほど悲しいことがあるであろうか。

ふとフクシマ以後の私たちの故郷喪失を思った。

森の喪失も、原発による故郷喪失も、大きな権力に巻かれて始まり、巻かれて終わる。未来さえも失う。

「私たちの無知を利用されないように」。大きなものに巻かれないように。どう生き、どう抵抗するか。未来へのまなざしから、現在の生き方を決める。今それが問われていると思えてならない。

ゴゴール関係の資料になる清水靖子著の関連図書

「森の暮らしの記憶」自由国民社　（マーロン・クエリナドとの共著）

「日本が消したパプアニューギニアの森」明石書店

「森と魚と激戦地」北斗出版

○今回の調査旅行の参加者

マラクル村行きのボートを待つ、左からポール・パボロさん、彼の友人、大場信義、清水靖子、辻垣正彦

マラクル村の山と海の豊かさをカヌーに乗って満喫する池田光司

マラクル村の子どもたち

原生林からの水が溢れるいずみ

会員の皆様からの声

○「ニューズレター、写真が良いです。子どもたちの表情も・・。がんばって下さい。」（町田市Sさん）

○「きれいな写真の報告書をありがとうございました。感謝と祈りとともに。」（萩市Fさん）

○「いつも子どもたちに話をしています。これからもパプアの森の皆様の上に神様からの豊かな祝福がありますよう。お祈りしています。」（埼玉Tさん）

○「お話を楽しみにしています。大変な調査旅行、お疲れさまでした。集会には行きます。すばらしいニューズレター、ありがとうございました。」（川崎市Sさん）

○「ニューズレターNO.34号を読んで。私たち日本人の憩の場所は、たとえウサギ小屋でも家庭です。パプアニューギニアとソロモン諸島の人々にとっては、森が家庭だと思います。家庭に土足で入ることはどろぼうですね。会員になりたいと思います。」（横浜市Sさん）

○「パプアと天竜川は一夜潅水」「行く末を見届けたい。」などなど。（浜松市Iさん）

◎年会費・カンパ受付

郵便振替口座　東京001001-1-614216　パプアの森
2014年度（４月～３月）3000円
よろしくお願いいたします。

◎DVD　調査報告の動画　1200円（送料込み）を販売しております

ホームページ https://sites.google.com/site/pngforestcom/

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会

ニューズレター『太平洋の森から』第35号

発行：パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会

〒141-0031 東京都品川区西五反田8-10-14-206
辻垣建築設計事務所内　電話03-3492-4245